

北原糸子著『関東大震災の社会史』(朝日選書)

(東京大学大学院人文社会系研究科 准教授 鈴木 淳)

歴史学の分野での災害史研究を先導してきた北原糸子氏が、東日本大震災をふまえ、今までの研究成果に新たな論稿を加えて震災全体を展望できるように整理した著作である。

序章「メディアが捉えた震災」では、1節「震災地東京の状況—上空と地上から」で氏が近年発掘・紹介してきた宮内庁宮内公文書館所蔵の航空写真、東京都復興記念館所蔵の写真などを紹介しながら震災と直後の避難の概況を示し、2節では非文字資料研究センターの展示でも紹介された萱原白洞「東都大震災過眼録」を避難民の描写やその背景に注目しながら紹介する。3節は震災の翌月に発行された5つの女性雑誌の特集号の内容紹介で、雑誌の性格の相違のほか、震災自体やその報じられ方の多様性が示される。

第1章「関東大震災の救護と復興計画」では1節で震災直後の臨時震災救護事務局の設置経緯をたどり、2節で同局情報部が発行した活版刷りの震災彙報を紹介し、3節では同局発行の『震災被害状況並救護施設概要』の内容の一部を紹介する。4節は復興計画と題され、渋沢栄一の協調会副会長、帝都復興審議会委員としての参画に注目しながら後藤新平の社会政策・復興構想とその当面の帰結を描く。

第2章「震災地の罹災者・東京—救護の力」では1節で市による罹災者数や避難場所の把握状況を追い、2節では東京都復興記念館所蔵の避難者カードの作成経緯と、そのうち3800枚の分析結果を示し、3節では東京での医療救護の過程を幅広く展望する。

第3章「バラック設置から閉鎖まで」では、1節で『都市資料集成』第6巻別冊として東京都公文書館が翻刻刊行した報告書を主な材料に東京市のバラックを、2節は三井文庫所蔵資料を用いて三井のバラックを、3節では協調会のバラックを、それぞれ入居者の状況に注目しながら扱う。4～6節では主に都公文書館の所蔵文書によりバラックの廃止過程を描く。

第4章「地方へのがれる避難民」は、北海道、弘前市、秋田県、宮城県、新潟県、福島県、栃木県、群馬県、山

梨県、長野県、長野市、埼玉県、愛知県、滋賀県、京都府、奈良県などの行政史料を丹念に分析した成果であり、救護班の派遣、救護物資送付、そして避難者の救護と彼らの希望調査、11月15日の避難者調査などをたどる。



第5章「震災義捐金を活かす」

では1節で震災以前の義捐金のありかた、2節では前章と同様な史料を用いながら地方庁による義捐金、3節では大震災善後会、新聞社や諸団体の義捐金を扱い、4節では閣議決定によって義捐金が罹災救助基金と同等の扱いを受けたと指摘する。

終章「帝都復興計画の行方」では、1節で臨時議会で復興予算が削減経緯と都市計画官僚や社会局官僚が復興計画立案に果たした役割、2節では山本内閣総辞職後の復興への取り組みを扱い、3節では後藤新平日記から震災直後の朝鮮人問題の情報入手と政友会による復興予算削減への感想を紹介する。

それぞれ、長年の非文字、文字両分野の史料調査に裏付けられた叙述がなされており、現在の震災研究の第一線を示す成果である。以上のようにかなり多様な内容を含んでいながら、本書の冒頭では「本書は関東大震災の震災地東京の避難民の動きを追ったものである」とされる。しっかりとした調査に基づく第2～4章の内容を示すには適切だが、本全体の性格規定としては、やや違和感が残る。しかし、都市計画とか行政担当者の方を向きがちな震災研究のなかで著者の視点は一貫して一般の被災者に向けられており、その点で正しい表現であるといえよう。本書を読んで改めて震災そのもの、それをめぐる史料、そして研究課題の多様さを確認させられるが、震災への関心が深まっている好機に氏の良質の研究成果が入手しやすい形でまとめられたのは、これからの研究の発展のためにも、多くの人々の震災への理解を深める上でも何よりである。